

## イメージスケッチを用いた原風景に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○鯨坂 健太

熊本大学 正会員 星野 裕司

熊本大学 正会員 増山 晃太

### 1. はじめに

#### 1-1. 背景・目的

人は、日々の暮らしの中で何気なく風景を記憶している。その記憶に残っている風景は、必ずしも観光地のような非日常的な風景ではなく、幼少期の通学路や部活動を行っていたグラウンドなど何気ない日常的な風景が記憶に残っている場合もあり、各個人により異なる。つまり、記憶に残る風景とは、個人的な経験を通し、記憶に焼き付き、内面化された風景と捉えることができる。そのような幼少期や青年期のいわば自己形成期に住み暮らした土地の記憶に結び付いた風景を一般的に原風景と呼ぶ。原風景は、何気ないごく平凡な風景である場合が多いため環境が変貌しやすく、自分自身を失ったような不安を覚える場合がある。このことから、原風景は肯定的、積極的意味を与えるものであるが、個人的で日常的な風景を捉える手法は、未だ確立されていない。

本研究は個人的な風景に着目し、主体が日常生活を送っている環境の中から発見した風景に関する記述を分析、風景を形作る空間構成要素を抽出、分類し、記憶に残る風景としての原風景の特徴を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究対象

#### 2-1. 概要

熊本大学の学部生への課題として出されたレポート、3年分（平成30年度、平成29年度、平成28年度開講分）241個のデータを研究対象として取り扱い、レポートに記述されているスケッチ及びテキストを分析していく。このレポートは、大学2年次の学生に対し、必修科目であり、初めての景観分野の授業である「景観工学」の導入として課されたものがある。課題の内容は、自分の原風景（一番の思い出となっている身近な風景）を思い出し、その原風景を絵（スケッチ）と文章で、絵日記風に表現するというものである。留学生のレポートに関しては、上田の論文<sup>4)</sup>において、風景イメージの形成には、文化的な側面も含まれると示されていたため、今回の研究においては、留学生のレポートは分析の対象外とした。

#### 2-2. 対象の独自性

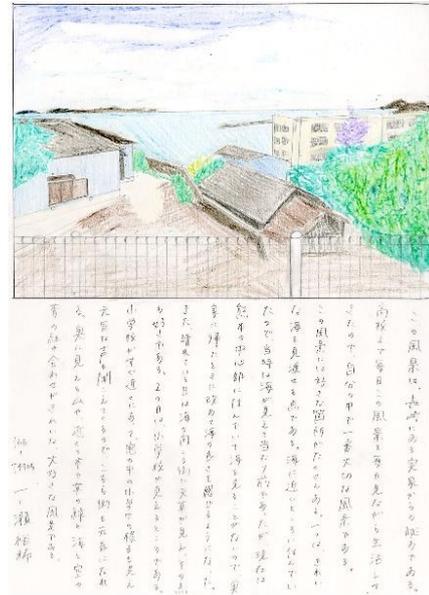


図-1 レポート一例

本対象は授業の課題であるために、人々が実生活の中で自然と風景を発見するような、主体的な風景発見の記述とは言い切れない。しかし、レポートを行った学生らは景観の初学者であるため、専門知識を有しておらず、これらのレポートは、日常生活での自然な風景発見の記述に近いものであるとみなすことができる。また、スケッチを用いた研究では、上田らのイメージスケッチ手法を用いた研究が参考になる。その研究では、スケッチに色を付けず、想起された風景を簡潔に短時間で描き、インタビュー調査を通し、風景に対する情報を補足して研究を行っている。これと比較し、本対象は、提出期限を課題内容発表から2週間後としている。ある程度期限を長く持たせることで、その場所での出来事等を思い出させ、じっくりと考えるために、その後行う記述へ認識内容がより多く反映されるようになる効果があると考えられる。また、スケッチでは、風景となった空間に存在する空間構成要素や、自らが何を想像したのかなど、その風景に関しての様々な情報が詳細に反映されていると考えられる。

### 3. 研究方法

#### 3-1. 研究対象の概念モデル

レポート記述者は、課題内容発表から自分にとっての

原風景をイメージし、そこから想起された環境をレポートに表現するものと仮定する。また、原風景として想起された要因には、物理的要素と心理的要素が存在すると考え、分析を行う (図-2)。

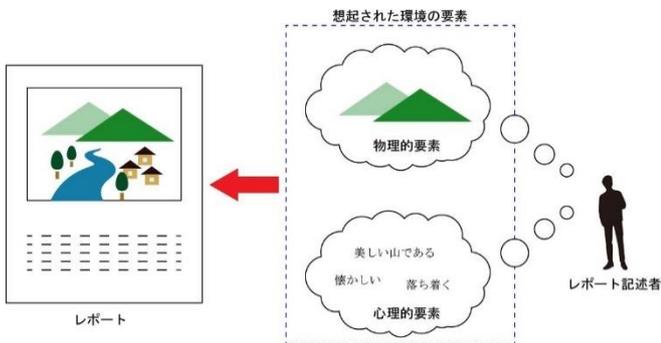


図-2 研究対象の概念モデル

### 3-2. 分析の枠組み及び構成

上記で記した物理的要素および心理的要素の分析に伴い、レポートのスケッチとテキストとの対応関係に整理した (図-3)。物理的要素の分析においては、スケッチから風景を形作る空間構成要素を抽出し、その空間構成要素を説明する文をテキストから抽出及び補足し、分析を行っていく。また、心理的要素の分析においては、テキストから風景として思い出す要因やその風景の解釈及び評価を示した文を抽出し、分析を行っていく。



図-3 分析の枠組み

## 4. 物理的要素の分析

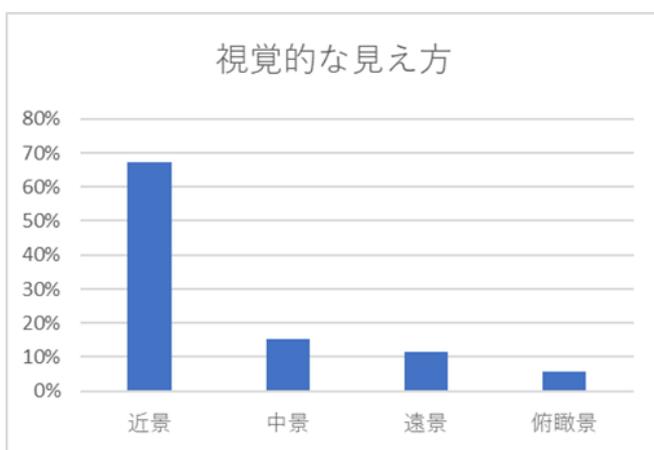


図-4 視覚的な見え方

物理的要素の分析においては、視覚的な見え方、視点場、空間構成要素の3つについて、スケッチ及びテキストから想起された風景について把握する。視覚的な見え

方においては、テキストより主題として描かれている空間構成要素を把握し、「近景」、「中景」、「遠景」、「俯瞰景」の4つのいずれかに分類した。分析結果としては、全体のデータにおいて、近景が全体の6割以上を占めた。このことから、環境の全体像を捉えたものよりも、レポート記者が直接取り巻く環境のほうが原風景として想起されやすい傾向にあるといえる (図-4)。

## 5. 心理的要素の分析

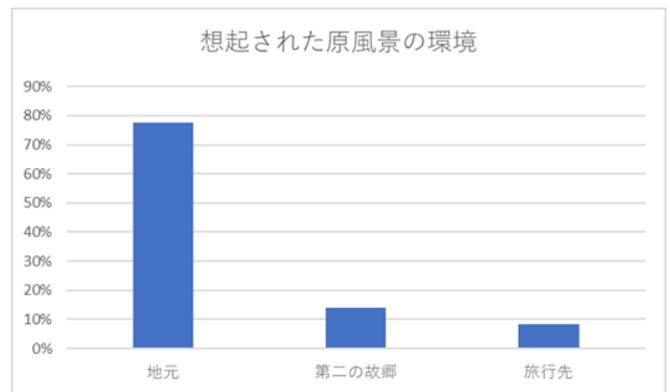


図-5 想起された原風景の環境

心理的要素の分析においては、想起された原風景の環境、風景が記憶された時期、風景との関わり方の3つについて、テキストから想起された風景について把握する。想起された原風景の環境においては、テキストを読み取り、「地元」、「第二の故郷」、「旅行先」の3つのいずれかに分類した。分析結果としては、全体のデータにおいて、地元が全体の7割以上を占めた。このことから、想起された環境を訪れた頻度の高いものほど、原風景として想起されやすい傾向にあるといえる (図-5)。

## 6. おわりに

本稿では、各要素の一部の分析結果について提示した。今後は、分析を行い、研究対象からみた原風景の全体像の把握及び考察を行う。

### 【参考文献】

- 1) 篠原修編：景観用語事典，彰国社，pp.12-13
- 2) 吉村晶子：原風景の生成に関する研究 ランドスケープ研究 67(5),2004年
- 3) 尾野薫ら：「記憶に残る風景」のイメージスケッチ 景観・デザイン研究講演集 No.15 2019年
- 4) 上田裕文：風景イメージスケッチ手法の構築に関する研究 日本都市計画学会 都市計画論文集 No.44-3 2009年